

陸軍大將及木希典は、蒸暑く垂れこめた夜の闇を破って、明治大帝靈輦発引の号砲が、殷々と諒闇の大都に響渡るを、莞爾と笑んで潔よい殉死の刃に伏した。

其の号外を見た村人は、それ程までに驚きはしなかった。

「おうたさんでさへ、あ、して死んだからなあ。」

村人は乃木大將の死を決して軽んじたのではない。老女の死が、たゞあまりに立派なのであった。

○
何日から誰がやりだしたとか、庄兵衛の家の婿夫婦の闇を、雨戸の節穴から垣間見ることが、村の若者達の間、ひそかに楽しまれた。それはやがて、学校に通ふ子供達の耳許へまでも叫ばれるやうになったが、しかし子供達は、若者達の拳骨が怖ろしくて、さすがに、畑から中へは近附けなかった。

噂は噂を産んで、とう／＼昼間でさへ、影深い闇の雨戸近く忍びよる若者の姿も見かけるやうになって、庄兵衛の畑の南瓜は、日毎、眼に見えて荒らされて行った。程なく、この垣間見の話は、若者達の親達の間にも、笑ひ話の種を播いた。

が、或る日、その闇の周囲に忍んだ若者達は、一齋に、庄兵衛の婿の堂々たる訪問を受けた。そして、明白な理由を聞かされ、こそばゆい顔を赤く染めさせられた上に、その鉄道工夫たる岩畳極まる掌の上に、南瓜を踏みつけた償金を、尽く支払はされねばならなかった。金を受取った婿はまた堂々と立去って行った。『面倒臭へから、今夜っからあ、錢を握ってやって来い。』

○

皆、黽くとも十年前の記憶しかない人達に、弔慰やら久瀕を述べた自分は、折悪しく疼きだした齒の痛みを嚙占めて、亡き祖母の末弟の隣りに座った。自分の古い思出にあるこの大叔父は、既に崩れか、つた自分の生家の屋台骨から、最期の甘汁までも吸取らうとしたあの幾人もの虫のやうな人達の一人として、悲しくも記憶されてゐたのであったが、今見るその人は、何日の間にか、年と共に好人物らしい懐しい老人になりはて、ゐた。そして、見も知らぬ自分の東京の生活などを、羨むばかり根問ひする。然し、炎天を三里の間俤に揺られて来た自分は、事のほか疲れてゐて、羽織袴の窮屈さに、ものさへ言ふが億劫だった。

東照宮々司杉江榮禮之靈と書いた位牌の後ろには、柩が置かれて、その囲りでは出棺の用意がお山の入々によつて始まった。榊の枝に幣を結ぶ人、火鉢に火を起して笹をあぶる人。やがて箱から取出した紙鳶のやうに大きな装束をつけると、そこらに働いてゐた人達は、一様に清々しい神官の姿に変わった。

屋後の浜に打返す浪の音が轟々と聞えて、坐ながら振返へれば大海の怒濤が一眼に見渡される。齒が痛い。懶く扇を使ふ。知り人らしい後姿がちらりと見える。神官に交つて、同じく束帯の喪主の能面のやうな顔が柩の向ふをあちこちする。

客の間を斡旋してゐる着飾つた若い女達の中に一人、思出せない顔がある。思出して見やうと色々に考へてゐると、向ふでも時々物陰から自分を見てゐるらしい。

杉江榮禮は自分の大伯父であるが、自分とは既に十幾年も逢ふことがなかった。おそろく自分は、その健在さへ忘れかけた